

## 第 64 回(2012. 2.11 配信)

### 雲竹齋先生の歴史文化講座－「中東・アラブ社会 (12)」

#### 肥沃の三日月地帯(歴史 1)

中東における人類の生活の歴史は非常に古く、ガリラヤ湖の南にある旧石器時代の遺跡はおよそ 90 万年から 70 万年前のもと言われている。また、シリア北部のユーフラテス川流域においても、紀元前 7000 年頃の原始農村の跡が日本の考古学調査隊によって発見されている、イスラエルのエリコの遺跡でも同時代の村落があったことがわかっている。

紀元前数千年の頃、トルコに源を発したチグリス川とユーフラテス川とに挟まれた一帯に、世界で最初に農業、牧畜による生産を開始し、高度な文明が築かれていった。現在のイラン・イラク南部で、これをメソポタミア文明といい、シュメール人という人種により世界最初の都市国家が形成され、豊かな大地の恵みを受けて麦を栽培しパンを焼きビールを醸造して、高度な文化を育てていった。彼らは、税の徴収や穀物取引などの経済活動の記録をするため、「楔形文字」を発明して、粘土で造られた板に記録をしていたが、その記録によるとチグリス・ユーフラテス川から、この地に張り巡らせた運河によって灌漑農業が発達し、大麦の収穫量は蒔いた種の 70～80 倍だった。また彼らが醸造し愛飲していたビールも、30 種類以上の銘柄もあったというから、シュメール人の文明は非常に高度だったと推測される。このメソポタミアからパレスチナ(イスラエル、ヨルダン)、シリア一帯は「肥沃な三日月地帯」と呼ばれて文明が発展していった地域でもあった。この高度な文明を築いたシュメール人はどこからやって来たのか不明だが、その後アラビア半島はアフリカ大陸やアジアからの民族大移動の十字路となっていたのである。

ここは、『旧約聖書』の舞台となったところで、アブラハムが神の祝福を受け、ヤコブが神と闘って勝ちイスラエルと改名した地である。そして、エジプトからモーセがヘブライの民を率いてやってきて、神ヤハウェと契約したのもこの地だった。また、イエスが洗礼を受けて布教活動し、ゴルゴダの丘で十字架に懸けられて、その恨みからローマ帝国によってユダヤ人が追い出されたのもこの地である。さらに、ムハンマドが出てイスラム教を興し、巨大な帝国を建設して首都をおいたのもこの地だった。その結果、現在は混乱の坩堝と化してしまったのである。

紀元前 3500 年頃、言語学的に「セム語族」と呼ばれる人種が、メソポタミアを中心にして、この肥沃な三日月地帯に移動してきた。これが「第一次セム語族の大移動」と言われ、第 2 回目は紀元前 2500 年頃、第 3 回目は紀元前 1500 年頃、第 4 回目は紀元前 500 年頃と、都合 4 回にわたって大移民団がやってきたという学説がある。この学説によると、最初に文明を築いたシュメール人による都市国家は、メソポタミアの北部に移住してきたアッカド人にとって代られ、第二次セム語族の大移動でやってきたアッシリア人やバビロニア人などが次々と国家を統一し、この肥沃な三日月地帯もエジプトを含めて覇権争いの戦場となっていたという。

このアッカド王国を滅ぼし、バビロンを首都としたバビロニア帝国第 6 代のハンムラビ王は、「目には目を、歯には歯を」という刑罰で有名な『ハンムラビ法典』を制定し、果敢に遠征を繰り返して領土を拡大しただけでなく、運河の開通や灌漑の整備などで農業を振興させて、この地をオリエント第一の穀倉地帯にしていった。そして、現在のトルコ地方に展開していたヒッタイトは、鉄製武器と戦闘馬車による新戦術でこの地方を蹂躪した。紀元前 1285 年頃の現シリアのカデシュでラムセス二世(エジプト第 19 王朝)の戦車兵団を壊滅させたのは歴史上有名である。

また、同じ第二次セム語族の大移動で、カナン人とよばれる民族はシリア西部からヨルダンにかけて地中海沿岸地方に移住して、商業的な都市や港湾型都市を建設していったが、このカナン人が、後にギリシャ人によってフェニキア人と呼ばれた人種である。この民族が発明した

文字がフェニキア文字といって、現代のアルファベットの基になったといわれているが、彼らの商業民族という性格から航海術が発達しており、独自の文字の開発・発明が必要不可欠だったと思われる。この航海の上手な商業民族は、東西の交易によってメソポタミア、エジプト、エーゲ文明を融合していったのだが、地中海の至る所に植民地を持ち、例えばチュニジアのカルタゴなどはフェニキアの植民地として建設されて、次第に強国となってローマと覇権を争った。この戦いが有名なポエニ戦争である。彼らの交易品は、貴金属を始めとする装飾品や衣料、食品、家具調度品から武器に至るまで有りとあらゆるものだったが、特にこの地方からの産物としてはブドウ酒、オリーブ油、ガラス製品などの他、レバノン山脈から伐採されたレバノン杉は、樹木の少ないメソポタミアやエジプトでの必需品だったし、悪鬼貝の一種から採れる染料は「フェニキア紫」と言われて珍重されて、西洋では無くてはならないものだった。

### 《閑話》外観ではわからない(カスバ)

友人のなかには「カスバの女って唄があるじゃないか。カスバって風俗店か？」と言ったものがある。かなり以前だが、『カスバの女』という演歌が流行した時代があった。そこからハーレムとかベリーダンスなどのイメージと重なって、歓楽街だと想像するのかもしれない。カスバは中世から人々が生活している旧市街のことである。そうすると、友人たちは一様に興醒めしたような顔をするが、カスバは場所によってはメディナとも呼ばれている。メディナという地区とカスバという地区が一緒になっている町もある。このカスバとメディナの違いは、地方の役所や公共機関などを有する中心都市を「カスバ」といい、地方の中小都市を「メディナ」と呼んだ時期があったが、近世では呼び方に区別がなくなり、今では混然としている。そこから、カスバは要塞でメディナは一般庶民の住宅街だという人もいる。

ちなみに、こういった中世からの街には必ず設置される五つの施設がある。モスク、学校、隊商宿、市(市場)、銭湯の五つだが、大きな町では街区ごとに、この五つの施設が設置されている。現在では、生活上の便利さもあって、平坦な場所に広い道路と大きなビルが建つ新しい街が形成されているが、旧市街に住む人々は古い街並みに大きな誇りを持っている。

このような昔からの街は、中世のヨーロッパの都市と同じで、街全体が高い城壁に囲まれている。だから城塞都市であったことは間違いない。街の中は道路が狭いうえに曲がりくねっていて、家畜や人間が通るのがやっとである。この道路に面した家の壁は日干し煉瓦を積んでその上から泥を塗っただけの、しかも窓がほとんどないお粗末なもので、壁が非常に分厚い。どの家も外側から見れば区別がつかない。それは、敵が侵入してきても迷ってしまうように、わざと外観を同じような造りにしているのだが、道路が狭くて窓がなく壁が分厚い作りなのは直射日光を防ぐ目的もある。しかし、外観はお粗末だが、内に入るとそこは別天地の様相を呈している。家が「回」の字型をしていて、真ん中にタイル張りの中庭があり、中庭に向いて数多くの部屋がある。中庭には噴水がある豪華な家もある。このような家の造りはメソポタミア文明発祥のころと変わっていないという。街の中は、狭い道を行き交う人々の喧噪や体臭、それに立ちのぼる埃と共に、家畜の匂いや炊事の煙で一種異様な雰囲気醸し出している。

ここら辺まで話を進めてくると、友人たちはエキゾチックなロマンを求めて行ってみたいとか、そんな汚いところへ行きたくないとか、がやがや騒がしくなり、話をする雲竹斎の忍耐にも限界が来るのだ。